

第六期神楽坂建築塾 講義録Vol.2-a

フィールドワーク神楽坂編

日時：5月9日(日)9時~12時 場所：神楽坂
講師：鈴木喜一氏(建築家・神楽坂建築塾事務局代表)

2004年5月15日 編集発行、文責：神楽坂建築塾事務局
〒162-0805 新宿区矢来町114 アユミギャラリー Tel.Fax.03-3269-1202
http://ayumi-g.com E-Mail ag@ayumi-g.com

神楽坂コースフィールドワーク

神楽坂建築塾の拠点ともなる「神楽坂」。曇り空の中、新塾生23名が集まり第1回目のフィールドワークが行われた。まず、講師の鈴木喜一より、アユミギャラリーについて語られた。神楽坂一帯は第二次世界大戦で焼け野原となり、現在のアユミギャラリーは、戦後間もない昭和22年、高橋博建築事務所として建てられたもの。ハーフティンバー風の外観と櫓が立つ中庭との連続した空間は都会の中のアオアシスの場所となっている(アユミギャラリー存続についての詳しい内容はアユミギャラリーウェブサイトを参照してください)。

その後一行は横寺町にある鈴木喜一自邸(横寺の家)、隣接する一水寮(神楽坂建築塾の寮)、さらに奥の柿の木荘へ移動。こちらも昭和20年代の建物で、以前は高橋博自邸とその建築事務所に務める大工さんの寮であった。

神楽坂通りを渡って白銀公園に入る。ここは、神楽坂でも古い公園で、緑が多く家族連れやサラリーマンの憩いの場所として人気がある。

白銀公園を出てひょうたん坂を下り、大久保通りに至る。大久保通りを挟んで東側には26階建ての高層マンション、西側にはビルの狭間で営業を続ける第三玉の湯が佇む。昭和20年創業の第三玉の湯は神楽坂に四つある銭湯の一つで、建築塾生御用達である。シンボルである煙突が去年消えてしまったのは、後から建った高いビルの住民から「洗濯物が汚れる」「ダイオキシンの出る」と苦情がでたからだそうだ。

一方高層マンションは、住民の反対運動を押し切り2003年にオープンした「定期借地権付き」マンションである。定期借地権とは、普通の土地・建物セットの分譲マンションとは異なり、複数の人で地主から50年の期限付きで土地を借りるという方式で、土地購入費用、固定資産税などが不要というメリットがあるそうだが、狭い焼け野原になった神楽坂だが、その細かな路地の地割によって「坂らしさ」を留めてきたともいえる。26階建てのこのマンションは、その高さと大きさによって景観をすっかり変えてしまったのでは、との見方もある。今なお裁判が続いているこのマンション竣工後、次々に高層、大規模な建築が神楽坂に姿を現しつつある。がらもいくつか工事中の看板を見かけた。「今はこのように古い建物が次々に姿を消している。雰囲気が良いといっても、僕がここに住み始めた27年前のほうが10倍は良かった。いずれ、戦前の建物を色も形も復元したワルシャワのまちのように復元していきたい」と講師は語った。

次にむかったのは、武器商人のまちであったことが由来という兵庫(ひょうご)横丁。ここは細い石畳の両側に古い料亭や旅館が残る。飲屋の「伊勢籐」、文豪が執筆を行うことで有名な旅館「和可菜」、料亭「幸本」等々、一度は訪ねて欲しいスポット。続いて本多横丁からかくれんぼ横丁へ入ると、黒塀の料亭が軒を連ねる。花柳界(待合・置屋・料亭の三業で構成された場所)として栄えていた1960年頃の神楽坂には、料亭が80軒以上、芸者さんは450人程いたとされている。現在その数は10分の1程に減ったといわれているが、今も23歳~最高齢では94歳の芸者さんがいて、日々踊りや三味線の稽古をしているという。

路地から本多横丁へ戻ると老舗の雰囲気を残すた

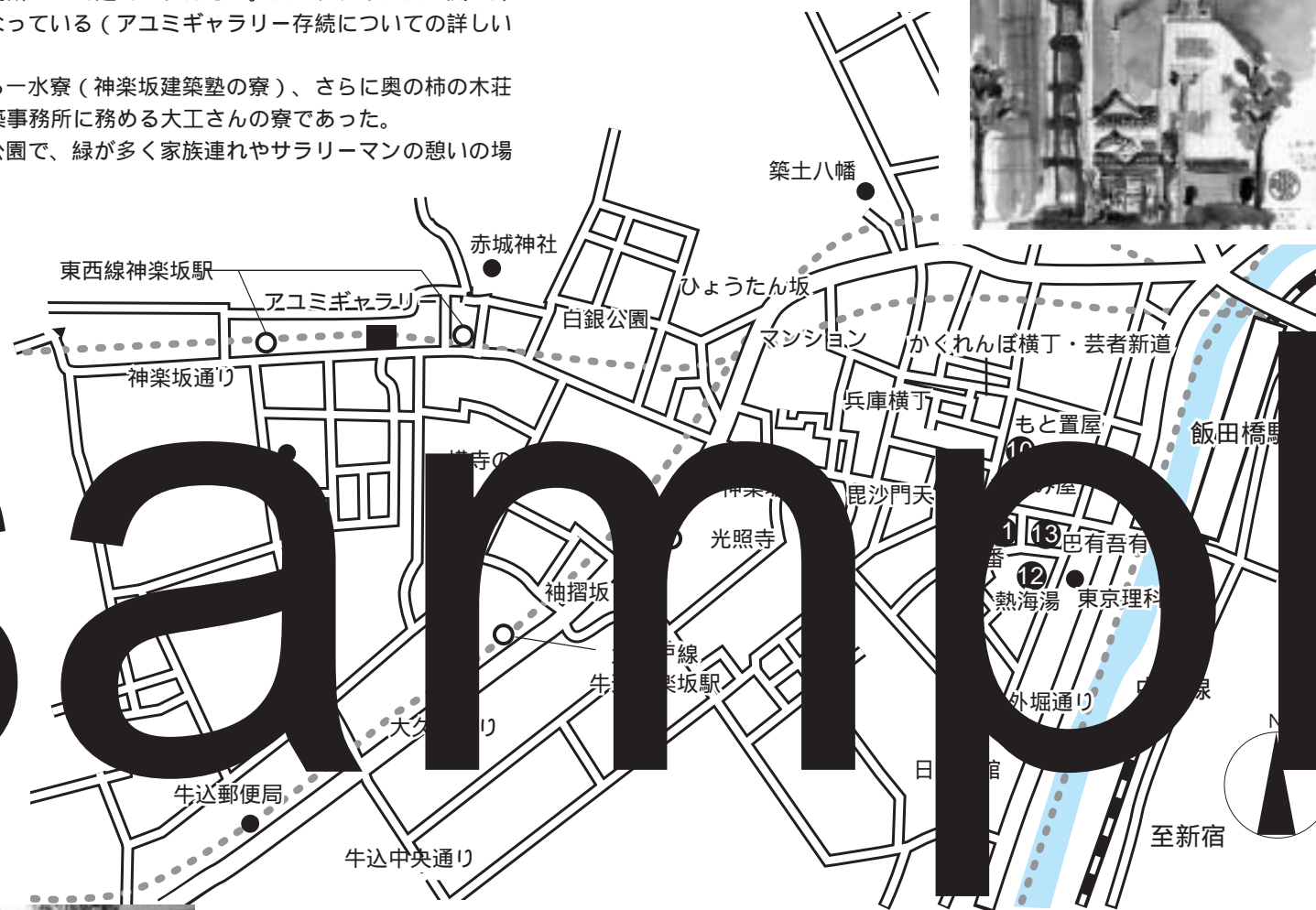


26階建てのマンション



横寺の家

煙突があった当時の玉の湯



sample



かくれんぼ横丁



たつみ屋



一水寮



横寺の家でのスケッチ講習会

つみ屋(どぜうや)や、もと置屋(芸者さんが待機したりお稽古をする場所)だったという建物がある。現在住宅となっており内部は見ることができないが、唐破風の玄関や杉板塀のアプローチなどが当時の面影を残している。

神楽坂通りを渡って小道へ入り、検番という芸妓組合事務局の前を通る。今でも芸者さんの稽古場にもなっており、三味線の音を耳にすることができる。

さらに路地を奥に進み石畳の階段を下ると二つ目の銭湯・熱海湯がある。煙突や番台が残る昔ながらの銭湯で熱いお湯で知られている。銭湯が残っている間は、一水寮や柿の木荘のような風呂無しアパートも存在できるのだが、銭湯がなくなると、古い長屋やアパートは必然的に姿を消すのだろう。

熱海湯から神楽坂通りに出て飯田橋駅にほど近いところに、民家を改修した二階建ての喫茶店 巴有吾有(パウワウ)がある。開店前だが特別に見学させていただき、店主の林氏よりお話を聞いた。巴有吾有の一階は以前洋品店であったとのことで、古いミシン台がそのままテーブルとして残っていた。設計を手掛けたのは当時まだ学生だったという高松六朗で、白井晟一(建築家・1905~1983年)のお弟子さん。どっしりした梁や柱が、民家を思わせる。住居だった2階は間仕切りを取り、柱を差し替えて喫茶ルーム兼ギャラリーとなっている。ここには和可菜で執筆をするという山田洋次監督も時折訪れるそうだ。

50年以上神楽坂に住んでいるという林氏によると神楽坂の花柳界は戦時中、陸軍によって栄えたという。法律により待合禁止されたり、カラオケの流行でその文化は変化したというが、やはり料亭や芸者さんの雰囲気は神楽坂に残したいという。しかし相続税等の理由で料亭も姿を消しているそうだ。林さんを含めた街の人々は、年に一度料亭を利用して花柳界を絶やさないように努めているという。芸者さんは踊りや三味線だけでなく、話も上手で、やはり上品で美しい。

がばらつく中、巴有吾有を後にして横寺町まで戻り、鈴木喜一自邸を見学した。昔の雰囲気を残しつつ改修した内部空間。林氏からは「懐かしい感じがする」「落ち着く」などの他に、「寒くないのか」「暗くないのか」「不便なのでは」と質問が出た。

講師の鈴木は「寒さは湯たんぼやストーブ程度で凌げるし、その寒さすら楽しんでいる」「海外を見れば、電気が使える時間を決めるなどして節電しているところはたくさんある」「住む人の生活スタイルによって不便かどうか変わるのだろう」と答えた。

さらに塾生から「必要以上の明るさ、暖かさは自分の体質に合わない」「あまりに便利過ぎると、どうやら効率が良いか工夫しなくなる」「料理する水と水洗便所の水が同じなのはもったいない気がする」等意見がでた。一方で「古い民家(庄屋)に住んでいて、すきま風でとても寒い。暖かいという感覚がわからない」「老人が浴室や便所での急激な温度変化に対応できず脳卒中を起こすとも言われている」との意見もあった。

様々な意見を語りあった後、いったん解散し、各自神楽坂の気に入った風景をスケッチしてフィールドワークを終了した。(文/神楽坂建築塾事務局スタッフ・草道)